

# 未来に贈るメルヘン——鬼頭莫宏『なるたる』論——

小山 ひかる

はじめに

「命は代替がきくから命たりえるんだから」

『なるたる』(一二巻二三三頁)

地球上で二人きりになってしまった少女たち。一人の少女が最後にこう呟き、『なるたる』は閉じられる。壊滅的ともいえる最終話は、連載当初、多くの読者に衝撃と反感を与えたという。

鬼頭莫宏は、一九六六年生まれ、愛知県出身の漫画家である。彼の作品は、死の匂いのする少年少女に焦点を当てた陰鬱なストーリーが特徴的である。また、鬼頭は小学生の頃からメカが好きで、それは鬼頭の作品に多大な影響を与えている。彼のほとんどの作品にロボットや戦闘機が登場している。

そんな鬼頭の世界観が存分に発揮された作品が「なるたる」である。青年誌『月刊アフタヌーン』で一九九八年から二〇〇三年まで連載されていた。タイトルは、本作品のサブタイトルでもある「骸なる星 珠たる子」から名付けられている。

本作品の壊滅的な結末と、主要キャラクターの凄惨な死、物語を締めくくる少女のセリフなどから、連載終了後、一〇年以上経過する今日もインターネット上で議論を呼んでいる。

日本最大の電子掲示板サイト「2ちゃんねる」には、「なるたる」に関する感想が多く寄せられている。「なるたる読み終わった」(1)というスレッドでは、本作品の伏線や「竜の子」という生物の造形、緻密な武器の描写が評価される一方で、万人受けする内容ではないこと

や読後感が悪いことなどが指摘されている。グロテスクな描写が多いことや徐々に重苦しくなっていく物語から、作者の精神状態を疑う読者まで現れた。このような本作品の凄惨さに、「救がない物語だ」という感想も見受けられた。私も、本作品を一読した時、同じ感想を抱いた。しかし、「救がない」物語に私を含めた多くの読者が惹きつけられている。それは何故か、論じていこうと思う。

なお、テクストの引用は単行本版『なるたる』(一九九八年八月〜二〇〇三年一月、全一二巻、講談社)を使用する。

論中では、『なるたる』(●巻●頁)と表記する。

## 第一章 作品紹介

主人公「玉依シイナ」は明朗快活な、どこにでもいる小学校六年生の女の子である。夏休み、父の実家がある離島へ遊びに行った際、奇妙な生物と出会う。星形で、空を自在に飛ぶことも出来るそれを、シイナはホシ丸と名付けた。ホシ丸は、言葉を発することは無いが、シイナと一緒に来る意思があるようだったため、東京の実家へ連れ帰ることにした。

一方、人類は既に空に正体不明の飛行体を認めていた。既存のどのような生物にも属さず、機械のように無機質なそれらを、「竜の子」あるいは「竜骸」と呼んだ。同じくして、竜の子と意識をリンクし、自在に操る子供たち「リンク者」が現れ始めた。竜の子に意思はない。竜の子は人間の思考を借りて動くことが出来、人間は竜の子に思考を与えれば竜の子の力を使うことが出来る。また、リンク者と竜の子が一体化した時、竜の子は「成竜」に、リンク者は「乙姫」となり、永遠に朽ちることのない存在になる。

リンク者の中には、竜の子を行使して世界の改変を目論む「黒の子供会」の存在があった。彼らは、無差別な殺戮を繰り返し、優秀な人間のみが生き残る世界を創ろうとしていた。「黒の子供会」とシイナは対立を深めていく。

シイナを守るリンク者の存在がある。「鶴丸丈夫」という青年である。彼はホシ丸のリンク者であり、ホシ丸をシイナのもとに置き、シイナを守っていた。そんな鶴丸に思いを寄せせる少年、「古賀のり夫」は少女と見まがうほどの美貌を持っている。彼は物語終盤に凄惨な死を遂げるのだが、それについては後ほど言及していく。

「黒の子供会」のリーダー的存在の「須藤直角」は、世界中に核爆弾を投下し、地球全土に核の冬をもたらそうとしていた。その目論見を止めるため、シイナは父親が操縦する戦闘機を護衛に従えて、須藤の元へ赴く。シイナが須藤の元へたどり着いた時、彼は既に瀕死だった。何日も飲まず食わずでいたようだ。彼はシイナに最期の言葉を残すと、静かに息を引き取った。

シイナには自分の名前にコンプレックスがある。「シイナ」は漢字で「稚」と表記する。殻ばかりで実の入っていない殻という意味である。このような名前を付けられたシイナは、明るい少女である一方で、母親に愛されていないと思いついでおり、自己否定感と母親への嫌悪感が強い。それが、自らの女性らしさの否定にも繋がっている。物語の終盤で、シイナには「実生」という名の姉が居たことが明らかになる。実生はシイナが物心つく前に不審な死を遂げていた。「稚」という名前は、実生のように離れていって欲しくないという母の願いから名付けられたものであった。シイナは母の願いを知り、自らの名前を受け入れる。名前を受け入れた瞬間に、シイナは竜の子、地球の半分とリンクする。

「黒の子供会」のリーダーの死によって、世界の危機は去ったが、彼らを始めとするリンク者によって虐げられた者や、竜の子によって親族を殺された者、竜の子という存在自体を恐れる者は、リンク者や竜の子を忌み、恨みを抱いていた。それらの人々の手で、シイナの母親、友人、鶴丸など、シイナの大切な人が次々に殺された。もう半分の地球「シエオル」とリンクした少女、「涅見子」は、人間と社会を見限り、自らの竜の子の力を行使し、自分とシイナ以外の人間を殺し、地球上のあらゆる文明を崩壊させた。

以上が『なるたる』のあらすじである。前章で述べたとおり、多くの読者に「救いが無い」物語であると言われ、作者の精神状態を疑う読者まで現れている。私は、「なるたる」最終巻の後書きを読んで、インターネットで飛び交うこれらの感想に疑問を持った。そこでは以下のように述べられている。

「かけがえない命」。そんなモノに救いを求めているも先には進みません。あなたがなくても、たいして困りません。

自分がいなくても、まったく困らないでしょう。

だからこそ、無くてもよい存在だからこそ、がんばるのだと思うのです。

『なるたる』(一二巻)

「なるたる」を締めくくる巻末のメッセージに、鬼頭が描きたかった世界観が集約されているように思われる。鬼頭は「かけがえない命」という道徳観に一旦否定的な態度を見せているが、それは決して自身の命や存在の否定に繋がるものではない。「無くてもよい存在だからこそ、がんばるのだと思うのです。」と述べているように、自己を肯定するのは社会の道徳観、あるいは他者による自己承認ではなく、自分自身であると考えていることが分かる。「かけがえない命」の否定は鬼頭にとって、他者が介入しない自己肯定への足掛かりであると見える。

さらに、鬼頭は自己肯定について、自身の価値観で以下のように述べている(2)。

自分の存在価値に悩んでいればいるほど「命は地球よりも重い」とか「かけがえない命」という言説に一喜一憂してしまいがちですが、そこから離れたほうがいいというのが持論です。(中略)その価値自体のよし悪しも「自分の心のなかの満足感」で決まるんだと思うんです。(中略)「誰かの期待に応えなきゃ」という呪縛に縛られてい

るうちは、自分の満足感に拠ることは難しいんです。

本作品のラストシーンにおいて、シイナと親しい人物が全員死亡することは、自身を肯定する他者の排除を意味するのではないかと考えられる。それは、鬼頭の言葉を借りれば、「誰かの期待に応えなきゃ」という呪縛からの解放でもある。これらの鬼頭の考えが組み込まれた本作品は、一見すると陰鬱な物語に読めるが、彼なりの前向きなメッセージが込められているのではないかと考えた。後に、本作品における鬼頭の道徳観をより詳しく考えていきたい。また、物語中の伏線、シイナが名前を受け入れたことによる自己肯定から、物語の閉じられ方を考察していきたい。

冒頭でも述べたが、鬼頭の商品には青少年少女に焦点を当てたものが多い。『月刊IKKI』にて二〇〇四年から二〇〇九年まで連載されていた「ぼくらの」、『Goodアフタヌーン』にて二〇〇九年から連載されている「なにかもちがつてますか」などがそれに当たる。どちらの作品の青少年少女も「なるたる」における青少年少女と同じように、生と死に向き合っている。鬼頭は、

青少年少女に「死の匂い」を

感じる年齢になりました。

『なるたる』（四巻）

と述べており、生と死を重点的に描いた作品において、青少年少女に焦点を当てているのはこのためであると考えられる。鬼頭が描く青少年少女のキャラクターについて、「ぼくらの」と「なるたる」を比較しながら分析し、鬼頭作品におけるキャラクターの特徴を抽出したい。また、そこから鬼頭が描く若者像と実社会で述べられている若者像の相差点・相違点を論じ

ていきたい。

「竜の子」のモチーフ分析はインターネット上で既に行われている。個人ブログ「オタクと形而上学」の記事「なるたる 背徳の神話」<sup>(3)</sup>では、「古賀のり夫」の竜の子「ヴァギナデンタータ」は南北アメリカ、アフリカ全体、インドやヨーロッパの神話に登場する「歯の生えた女性器」をモチーフにしていると指摘している。キャサリン・ブラックリッジは神話における「ヴァギナデンタータ」について以下のように解説している<sup>(4)</sup>。

飢えた顎。食欲な口。がつがつと貪り食う歯の生えた深い割れ目。ヴァギナ・デンタータ（歯の生えた女陰）は、民話や神話、美術、夢の世界に昔から氾濫する恐怖のイメージである。（中略）勇敢な男の英雄によってヴァギナの歯が抜かれることは、歯のあるヴァギナ物語の中心的な要素となっている。（中略）いくつかの物語では、女が歯を抜かれてから、つまり、飽くなき性と精神を破壊されて従順になってからやつと男が女と結婚する。

「ヴァギナデンタータ」の神話的モチーフを踏まえ、同ブログ同記事<sup>(3)</sup>では、歯を抜かれることで男を受け入れ生産性を発揮する「ヴァギナデンタータ」のイメージを、のり夫は男であるがゆえに、「決して男を受け入れない、生まない性」たる自分に読み替えているとし、豊穣の神話を不毛に読み替えていると述べている。

このように「竜の子」のモチーフはリンク者のイメージと関連している。他の登場人物の「竜の子」のモチーフについても考えていきたい。

次に、本作品がどのようなジャンルに位置づけられるのか考えていく。二〇〇〇年代、いわゆる「ゼロ年代」の漫画やアニメ、ライトノベルなどのポップカルチャーの多くが、主人

公と恋愛相手との感情的な人間関係が、具体的な社会領域の媒介なしに、世界の終わりなどの非日常的な大問題に直結する物語構造を持っており、「セカイ系」と分類されている。「セカイ系」作品において物語内で起こる戦闘の目的や、それを引き起こした敵の正体は明かされない。弱く傷つきやすい者が闘うことも「セカイ系」の特徴である。しばしば、政治・社会性の欠如が指摘されている。

「なるたる」には「セカイ系」の特徴が組み込まれている。未知の生命体「竜の子」を巡って、小学生から高校生の少女少女たちが闘い、傷つく。主人公、シイナの「セカイ」が壊されたことを契機とする世界の破滅。物語の核ともなっている「竜の子」の正体は最後まで明かされない。一方で、「バトルロワイヤル系」の特徴も持ち合わせている。

「セカイ系」の想像力から抜け出したのが「バトルロワイヤル系」である。学校などの閉じられた世界の中で、勝ち残る、あるいは生き残ることを目的に闘う物語を持ったものがそれに当たる。「なるたる」において、リンク者達が野望を実現するため、あるいは阻止するために、闘い、時に倒れていく。これは「バトルロワイヤル系」の特徴と言える。

以上のことから、「なるたる」はどちらのジャンルにも含まれる。それぞれのジャンルの観点から、本作品を考えていきたい。

本論では、以上の点から『なるたる』を論じていく。

## 第二章 作品分析

### \*キャラクター分析

物語の中心となる玉依シイナ・涅見子・鶴丸丈夫・須藤直角を対立関係から考えていく。本作品において地球は、シイナの竜の子と見子の竜の子「シエオル」の二匹からなっている、という設定である。これに関して見子は次のように述べている。

この星は 対極物の統一

二匹の竜

そして今は二匹の竜骸

あなたは私の光

私はあなたの影

『なるたる』（二二卷一七五頁）

シイナと見子はそれぞれ地球を成す竜の子とリンクする者であり、光と影の関係で対になっている。また、見子は「シエオル」とリンクする以前から、自身とリンクする竜の子の存在に気づいている。しかし、シイナは自身が竜の子とリンクするまで気づくことがなかった。以上のことから、シイナと見子は相反関係である。

次に、地球のリンク者である二人の少女を補助する少年たちについて考えていく。鶴丸がシイナを、須藤が見子を補助している。須藤は、補助者たる自身の役割について以下のように述べている。

僕が虚無

鶴丸君が混沌

虚無へ収斂する破壊と

混沌へ拡散する創造

でもそれはただの実行者であって……

判断するのが役目じゃないから……

『なるたる』（二二卷一三三頁）

須藤は、見境のない破壊行為で多くの人間を虐殺した。須藤のしたことは「虚無へ収斂する破壊」である。対して鶴丸の目的は創造である。鶴丸は、生涯で子供を百人作るうとしている。その理由は明かされないが、多くの女性と性行為をし、子供を産ませることは鶴丸にとって、「混沌へ拡散する創造」なのだ。

そして彼らの役割は「実行者」であると述べられている。須藤と鶴丸には、シイナと見子に「破壊」と「創造」の世界をそれぞれ見せる役割が与えられている。それらの世界を見た上で、どのような世界を生み出すかを判断するかはシイナと見子に委ねられている。思想も目的もない彼女らは周囲の人間の思惑に巻き込まれる形で世界と関わっていく。そして、最終的に世界を作り替える。彼女らは、世界の観察者であり、判断者であるのだ。

鶴丸と須藤の対立点は、物語上で重要であるが、彼らは殆どまみえることがない。そのため、互いの思想をぶつけあうことがない。また、彼らの思想を実現するのは彼ら自身ではなく、「判断者」であるシイナと見子である。つまりシイナと見子は、鶴丸と須藤の思想の媒介者として、世界を作り変える機能がある。

本作品において鶴丸と須藤のどちらの思想が実現されたのか、後に考察していく。

### \* 竜の子

竜の子とリンク者の関係は密接である。リンク者は思うまま、四肢の延長のように竜の子を操ることが出来る。また、五感の延長のように、竜の子と感覚を共有する。竜の子がダメージを負っても、傷一つ付かない。しかし、竜の子がダメージを負えば、リンク者がその分の激しい痛みを感じるようになる。なぜ、竜の子が人間の意のままに動くのか、作中において以下のように述べられている。

少年たちが竜の子 竜骸と呼ぶ その欠けたモノは

夢を見るために 自らが持つことのなかった

思考回路を求める（中略）

魂の受容体 魂の依り代 魂の入れ子

竜骸は魂を取り込み

竜—— 星の記憶となる

『なるたる』（二二巻一四七頁）

竜の子は、思考回路を持たず、それを人間に求めた。人間は竜の子の思考回路であるから、思った通りに竜の子を操ることが出来るのである。

前章で述べたように、竜の子にはそれぞれモチーフが付与されている。竜の子のモチーフとリンク者の関係性は非常に強い。その中から、特にモチーフとリンク者の関係性が強い竜の子を考察していく。

高野文吾の竜の子ハイヌウエレは、ハイヌウエレ型神話をモチーフにしている。ハイヌウエレ型神話とは、世界各地に見られる食物起源神話のひとつである。殺された神の死体から作物が生まれたとする神話のことで、ドイツの民俗学者、アードルフ・イエンゼンが、その神話の典型例としたインドネシアのセラム島、ヴェーマーレ族の神話に登場する女神の名前「ハイヌウエレ」から命名した。ハイヌウエレ型神話の原型となった神話は以下の通りである（5）。

ココヤシの花から生まれたハイヌウエレという少女は、様々な宝物を大便として排出することが出来た。ある時、踊りながら宝物を村人たちに配ったところ、彼らは気味悪がってハイヌウエレを殺し、生き埋めにしてしまった。ハイヌウエレの父親は、死体を掘り起し、切り刻んであちこちに埋めた。すると、ハイヌウエレの死体から様々な種類の芋が発生し、人々の主食になった。

文吾の竜の子は神話上のハイヌウエレのように多くの物を生み出していた。それは宝物や食物ではなく、人を虐殺するための武器である。食物起源の神話の、物を生み出す部分のみモチーフにされている。それどころか、食物起源、つまり生命起源にもなりうる神話を、不毛に読み替えている。

小沢さとみの竜の子アマポーラはスペイン語でヒナゲシを意味する。実際にヒナゲシの花の形と竜の子アマポーラの造形は似ている。植物の開花にはリンという元素が不可欠である。ハイヌウエレの神話において重要になる大便と死体には多量のリンが含まれている。このことから、大便から宝物を生み、死体から芋が発生するハイヌウエレ型神話をモチーフにした文吾の竜の子は、さとみの竜の子アマポーラにとって不可欠であり、また、アマポーラを咲かせる機能がある。

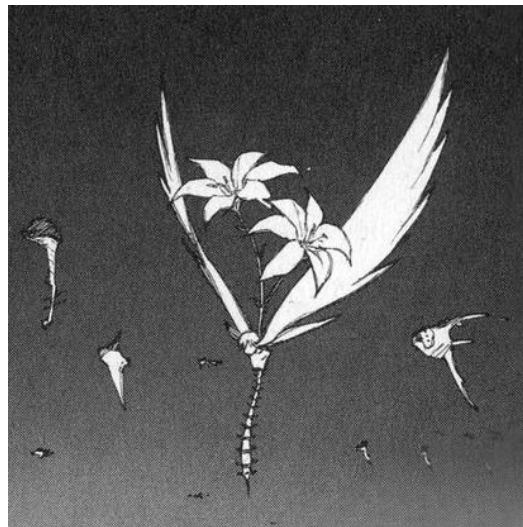
さとみは名門お嬢様学校「万孕学園」高等部の生徒である。しかし、彼女の家庭環境は決して恵まれたものではない。母子家庭で、母親がパートで生計を立て、狭いアパートで暮らしている。小学校時代は優秀で真面目なあまり、クラスメイトからいじめられていた。「万孕学園」中等部を志望し受験するも、家庭環境が原因で合格することは叶わなかった。

竜の子のモチーフがそうであるように、文吾がさとみを咲かせる機能があり、さとみにとって文吾は不可欠な存在であると考えられる。さとみは気性が荒く、わがままな人物であり、時折文吾に反発心を見せる。しかし、文吾はそんなさとみを小学校時代から支えてきた。さとみも、いざという時に必ず守ってくれる文吾に依存気味であるが、クラスメイトからのいじめを乗り越え、自信をつけるために、文吾の存在は不可欠であったろう。また、彼らには肉體関係がある。文吾は、さとみを女性として咲かせる機能があるが、文吾がさとみに抱く愛情は屈折している。文吾は幼少の頃、さとみに借りた女の子の人形の脚を削ぎ落としたことがある。これは、さとみの脚を切り落としてでも自分のものにしたという独占欲の表れである。

さとみはアマポーラが強いダメージを受けた際、そのショックで幼児退行し、文吾への依

存度がますます高くなった。文吾もまた、ハイヌウエレが強いダメージを受けたショックで廃人化している。二人の精神的な自立は見込めない。

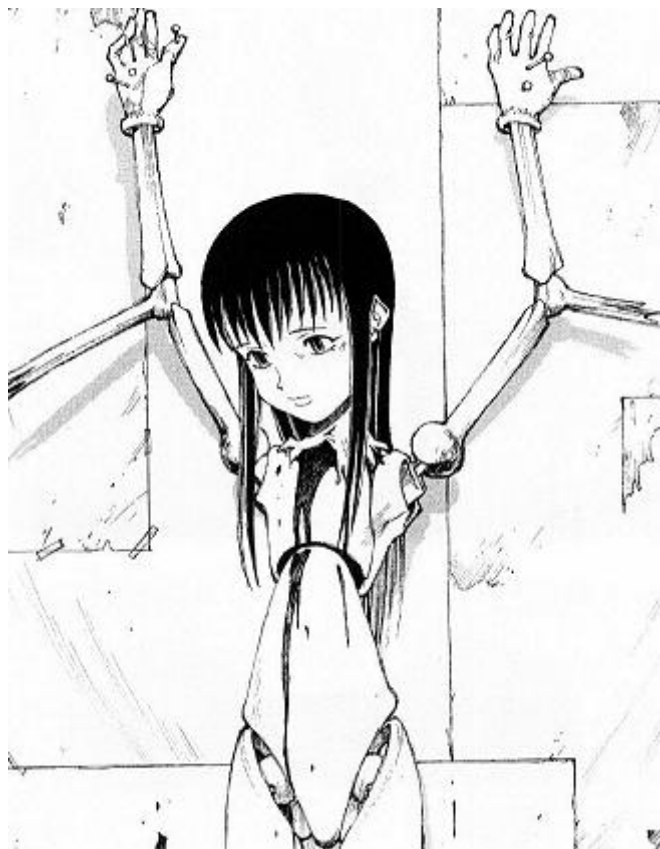
物語の最後に、ハイヌウエレと思われる竜の子からアマポーラと思われる竜の子が生え、花が咲いている様子が描かれている。共依存で結ばれた彼らの屈折した愛が実ったように見える。



『なるたる』（二二卷二三四頁）

この絵は、神話においてハイヌウエレの死体から芋が発生した様子をモチーフにしている。作中で、アマポーラの花が開花した際、毒ガスが発生し、多くの人間が死んだ。先ほども述べたが、ハイヌウエレも人間を殺すための武器を多く生み出している。よって、文吾とさとみの愛が実って進化したこの竜の子は、新たな生命を生み出す可能性としてではなく、死を生み出すものとなった。

神話の不毛な読み替えは、前章で取り上げたのり夫の竜の子、ヴァギナデンタータでも行われている。決して男を受け入れない、生まない性たるのり夫の竜の子は歯のある女陰、ヴァギナデンタータである。のり夫の死はキリストの磔刑を思わせる。



『なるたる』（二一巻一六頁）

彼は、シイナを守るため行動している鶴丸の支援のために、自らの竜の子を遠隔地に派遣し、鶴丸を守っていた。そこでヤクザに襲われ、生きながら解体され始めた。すぐに竜の子を引きもどせば容易にヤクザを倒すことが出来るが、遠隔地にいる鶴丸が死んでしまう。そこで、のり夫は自らの命を犠牲にして鶴丸を守るという選択をする。のり夫はヤクザに生き

ながら解体されるという受難を乗り越えながら、愛する鶴丸のために甘んじて刑に服したのだ。その後で復活することなく、命と引き換えに鶴丸からの愛を得ることも出来ない死は、救いのない、不毛な神話である。

佐倉明の竜の子はエン・ソフと名付けられている。ヘブライ語で「万物の始原」という意味である。明はエン・ソフとリンクした直後、上手くコントロール出来ず、エン・ソフは地面に叩きつけられてしまう。その痛みによって明は学校でおう吐してしまふ。この出来事から、明は竜の子という存在自体に恐怖を抱くようになり、物語中でエン・ソフを操ることはほとんどない。さらに、痛みへの恐怖が心に残ってしまったのか、高いところから落下する夢を繰り返し見ることになる。

明は、物語の終盤で、致命的な怪我を負う。彼女が自らの死を感じた時に以下の台詞を述べている。

結局――

一回も飛べなかったなあ――

『なるたる』（第二二巻一七二頁）

皮肉にも、明の死因は転落死である。「万物の始原」という由来を持つ竜の子の保持者でありながら、竜の子を一度も思うままに操り、自らの手で新たな世界観を想像することなく、過剰におびえていた転落という形で最期を迎えた。

以上から、何かを生み出すもののモチーフを付与されている竜の子は、そのモチーフに反している。そしてそのリンク者は、いずれも悲惨な末路をたどっている。

シイナの性の受容と自己肯定

ラストシーンにおいて、シイナを取り囲む他者が消滅することは、「誰かの期待に応えなきゃ」という呪縛からの解放である、という考察は前章で述べたとおりである。

シイナは、誰かの期待に応えなければならないという呪縛から解放されたことと同時に、他者からの評価の物差しが無くなった世界で、ゼロから自らの存在価値と向き合っていかなければならなくなった。

涅見子の手によって荒廃した世界になる以前、他者からの自己評価の物差しとしてシイナが考えていたものは、母親からの愛情である。前章で述べたが、シイナの名前は「殻ばかりで実の入っていない柵、熟さないうちにしなびてしまった果実」という意味であり、このよ  
うな由来で名付けられたシイナは、母親に愛されていないと感じていた。故に、シイナは母親を嫌っており、それが自らの女性らしさや、更には母になることへの拒否に繋がっていた。その意思是、以下のように頑なである。

だって決まってるんだから

あたしは結婚したりなんてしないし

子供なんか作らないって

『なるたる』（二巻一四四頁）

このように、シイナは女になること、母になることを強く拒否している。『なるたる』一卷においてシイナが初潮を迎えた際、その場で泣き崩れるほどである。そんなシイナが母から愛されていると知るの友人、佐倉明の以下の台詞である。

シイナちゃんお姉さんがいたんですよね

実生って名前の乙姫になった……

だから靴っていう名前

中身のない実

実ることのない種子

子供をいつまでも手元に置いておきたい

そんな親の願いが込められてる気がする

シイナちゃんのお母さんは……

シイナちゃんのこと愛してます……

シイナちゃんも……そう……ですよね

『なるたる』（二巻一六一〜一六三頁）

「靴」という名前は、竜の子の一部となり、行方不明となったシイナの姉「実生」のようになって欲しくない、いつまでも傍にいて欲しいという母の願いが込められたものであった。母の愛を知り、シイナは自らの名前と、女性であることを受け入れ、それがきっかけとなり、地球とリンクする。この直後、シイナはかねてから想いを寄せていた鶴丸に告白する。

鶴丸

好き

やっと言えた……

『なるたる』（二巻一九一〜一九二頁）

鶴丸に想いを告げることで、自らが女であると認めざるを得なくなることから、告白出来ずにいた。その葛藤が「やっと言えた……」という台詞から読み取れる。長い間抱き続けたいた葛藤が母親からの愛を知った途端に霧消したことから、母親の影響力を窺い知ることが出来る。

しかし、最終話で母親は殺されてしまう。母親からの愛があつたからこそ意味を持ってい



た「秕」という名前は、再び意味を成さないものになってしまったと私は考える。意味を成さなくなってしまった空っぽの名前は、まさに秕である。先ほども述べたが、鬼頭は「自分の価値はゼロである」というところから、自己の価値を見つめていくべきであると考えている。母親の愛に依存して名付けられた「秕」という名前の価値が、母親の死でゼロになってしまうことは、名前のせいで自己を否定し続けてきたシイナにとって、自らの価値がゼロになってしまふことに等しい。この「自分の価値はゼロである」という認識は、シイナが他者の承認に依らない本物の自己承認を得ていくためのスタートになるのではないか。この価値観が「なるたる」を締めくくる以下の見子の台詞に繋がっている。

「命は代替がきくから命たりえるんだから」

『なるたる』（一二巻二三三頁）

自らの命に代替がきくことは、母親からの愛を受けた「秕」という「かけがえのない」自分の否定である。「秕」と名付けられた意味は、母親の死で再び空になってしまった。しかし、代替がきくということは、母親からの愛以外の要素によって「秕」を満たすことが出来る。例えば、母としての自分。最終話でシイナは鶴丸との子を宿している。あるいは、地球を作り替えることの出来る創造者としての自分。様々な観点から考えれば、シイナのアイデンティティは一つではない。つまり、一つの自分が否定されても、アイデンティティの代替はきくのだ。

自分の存在意義、あるいは自分の命の価値を一つに絞ってしまえば、それが否定された時、生きる理由を見失ってしまうだろう。しかし、一つの価値が否定されても、再び別の価値を自らに付与し続けていくことが出来るならば、何度否定されても再び立ち上がることが出来る。本作品のラストシーンから、このような前向きなメッセージを読み取ることが出来る。

#### \* 性の倒錯

精神分析における象徴的な「母」とは、世界と未分化の子どもが癒着している存在である。この子どもと世界の間に分節線を引くのが象徴的な「父」の役割である。

シイナの両親は、象徴的な「母」と「父」の役割の性が倒錯している。シイナの母は、シイナが生まれてすぐに実生が死亡したことによって、シイナの育児をほとんど放棄し、やがて別居した。父親は、そんな母親に代わってシイナを育て、ずっと二人で暮らしてきた。シイナにとって父親こそが、象徴的な「母」たりえているのではないか。

一方、「父」である母親は、シイナと父親の癒着を切り離そうとする。定期的に会ったり、同居の提案をする。しかし、その度にシイナに冷たくあしらわれるため、その目的はなかなか達成されない。

そんなシイナが、父親以外の異性である鶴丸に興味を持ち始める。この頃から自らの女性らしさを意識し始め、後に初潮を迎えたことで、決定的に女性であることを認めざるを得なくなった。少しずつ父親との癒着から乖離し始めるきっかけとなった。

完全に父親からの乖離を達成したのは、母親からの愛情をまっすぐに受け止め、素直な気持ちで向き合うことが出来た瞬間である。癒着していた「母」であった父親が死に、「父」である母親の存在を受け入れた時、シイナは初めて世界と自分を切り離すことが出来たのだ。シイナは母親の存在だけでなく、父親の存在も乗り越えて、自らの竜の子である地球とリンクしたといえる。

#### \* 海中鳥居

第一話、ホシ丸とシイナは海中に建てられた鳥居の足元で邂逅する。最終話、その海中の鳥居が徐々に沈んでいく様子が描かれ、物語は閉じられる。つまり、本作品は、鳥居という枠を持っている。何故、このような枠を持っているのか。

鳥居とは、神社の参道の入り口に神域を示す象徴として建てられる門である。神は、人間

が自分を守るために創造されたものである。要するに、いたって文化的なものだ。竜の子たちにとって人間の文化などは全く関係のないものである。鳥居は、人間と竜の子、両者の間に超えられない境界があることを意味する。

鳥居は文化や神を象徴していると考ええると、海は自然を象徴する。また、「母なる海」という言葉があるように、海は生命を生み出す母親を象徴するから、海中に建てられた鳥居は、男性を象徴するといえる。さらに、人間の思考回路と魂を受け入れる竜の子は自然を象徴する。作中で竜の子について以下のように語られている。

竜を語る キーワード

万物の始原 大地の神

『なるたる』（第八卷一三〇頁）

さらに、竜の子が大地にまつわることを確認づけるように以下のように語られる。

竜の子 その構造に機能組織など見られなかった

表皮以外 鳥の骨のような空砲を擁する 均質体（中略）

そしてその組成

それはあるものの組成とほぼ一致した

地球の組成

『なるたる』（第八卷一三八頁）

また、本作品では地球はシイナと見子の二匹の竜の子から成っている。以上のことから、竜の子は自然、大地、地球の象徴である。先ほどの海中鳥居の性の比喻を用いて考えると、自然、大地、地球の象徴であり、人間の思考回路を受け入れる竜の子を女性、人間を男性と

して考えることが出来る。

つまり、本作品における竜の子と人間のファーストコンタクトであるホシ丸とシイナの邂逅は、生命の誕生でもあり、愛の始まりでもある。しかし、ホシ丸は、シイナの竜の子ではない。彼らが五感を共有することは決してなく、言葉による意思疎通も不可能である。彼らから生命や愛は生まれない。竜の子の神話的モチーフにおいても指摘したが、ここでも不毛な神話が生まれているといえる。

竜の子と人間が一体化することで、人間は乙姫に、竜の子は成竜に進化する。人間は、竜の子に魂を取り込まれ、成竜の思考回路として利用される。最終回において文化の象徴である鳥居が自然の象徴である海に飲み込まれ、消滅することは、竜の子と人間の境界が無くなることを意味する。同時に、人間が竜の子に飲み込まれることを意味するのだ。

人間は、既存の文化の枠を超え、竜の一部の乙姫となり、新たな生命として進化したのである。海中の鳥居はやがて完全に沈んでしまうだろう。それは、人間が完全に竜の子に飲み込まれ、溶け合い、一体化することを意味する。本作品は、竜の子という異形の生物と人間との恋愛譚として読むことが出来る。

あるいは、竜の子を地球、母として考えると、人間の魂が竜の子に取り込まれて一つになるということは、母なる地球へと回帰する、母体回帰の物語として成立する。シイナは象徴的な「母」との乖離を果たしたが、地球上に最後に残るのは「母」の元へ還り、一つになった成竜なのだ。

### 第三章 作家論

#### \* 鬼頭の世界観

第一章でも述べた通り、鬼頭の作品は少年少女たちに焦点を当てた陰惨な世界観が特徴的である。鬼頭は自らの作品の世界観について以下のように述べている。

計画があるんですよ、漫画の。世界観の下敷きを作っておきたいんですよ。20年だと  
思ってるんですけど。それは1本の作品でだけじゃなくっていろんなのを使ってやるん  
ですよ。ある單元についてはこれで説明して、利用してる下敷きっていうのか物理法則  
っていうのか、世界の法則は一緒なんですけど。その一部を切り出してくることによ  
って、別な見え方をするっていうふうに作っておいて漫画をつくるんですよ。その全て  
の漫画をあてはめると一つの柄になるっていう。

以上のことから、鬼頭は意識的に作品の世界観に共通性を持たせていることが分かる。こ  
こで、「なるたる」完結後に鬼頭が連載した作品「ぼくらの」の世界観と「なるたる」の世  
界観とを比較・考察していく。

「ぼくらの」は一五人の少年少女たちが、自らの命を賭して地球を守る物語である。彼ら  
は、巨大なロボット「ジアース」を操縦し、次々に現れる敵ロボットと戦う。ジアースの動  
力源は操縦者の命である。戦闘を終えると操縦者は力尽き、息絶える。彼らはそのルールを  
知らされることなく、「ココペリ」と名乗る男にジアースの操縦者として契約を結ばされた。

少年少女たちが戦う敵の正体は「枝状分岐字末端点」、すなわちパラレルワールドの地球  
人が操るロボットである。繰り返される戦いの目的は、無限に分岐し増えすぎたパラレルワ  
ールドを淘汰することであった。敵に敗北すれば、増えすぎた地球の可能性の一つとして全  
人類と共に死ぬ。戦闘に勝利しても操縦者は力尽きて死ぬ。いずれにしても死しかない少年  
少女たちの心の葛藤が描かれていく。

以上が「ぼくらの」のあらすじである。

ジアースと竜の子は、それぞれ人間が操って初めて動くものである。ジアースは人間の命

を、竜の子は人間の思考を動力源として動いている。どちらも人間がいなければ動くことす  
ら出来ない空の器のような存在である。また、ジアースは、人間のテクノロジーが一切通用  
しない。どんな化学兵器を用いて攻撃しようとも、傷一つ負わせることが出来ないのだ。竜  
の子にも、化学兵器が通用しない。これらのことから、「ぼくらの」「なるたる」の二作品の  
世界観には相同性が認められる。

しかし、人間との関係という観点から考えると、ジアースと竜の子には明白な相違点があ  
る。竜の子とリンク者は例外なく一対である。それも、あらかじめお互いがリンクし合うこ  
とが運命のようなもので定められている関係である。対してジアースは、契約さえ結ば誰  
でも操縦することが出来る。竜の子にとってリンク者はかけがえない存在である。ジアー  
スにとって操縦者は代替がきく存在である。

「なるたる」に登場する少年少女たちのほとんどに家族が居ない。もしくは家族の存在が  
明かされない。鶴丸丈夫、古賀のり夫、須藤直角、涅槃子、高野文吾らがそれに当たる。彼  
らが戦う目的は自らの思想を実現するためである。思想を実現させるためには、時に無差別  
に人間を殺害する。家族がいても、殺害する者もいる。そのため、「なるたる」には家族な  
どの大切な存在に対しての感情が希薄に描かれているように感じられる。対して、「ぼくら  
の」に登場する少年少女ら一五人には家族がある。彼らは死に際して家族などの大切な人を  
守るために戦う。ジアースの最後の操縦者、「ウシロ」は自らの命を賭して戦うことに関し  
て、以下のように語っている。

カナや田中さんやカンジは、

おれ達の知らない誰かからすれば

まったく知らない価値のない存在だろ。

そんなもののためにおれ達の知らない別の誰かが死んで、

そして別の誰かが悲しむんだろ。

全ての人間が、それぞれの、主役だろ。

その人も、その親とか兄弟に

大切に想われてるんだろ。

『ぼくらの』(一一巻一九四頁)

以上の台詞から、「ぼくらの」の世界観では人間同士の感情的な結びつきが強いことが分かる。「全ての人間が、それぞれの、主役」であり、「親とか兄弟に大切に想われている」、かけがえのない存在として描かれている。

「なるたる」と「ぼくらの」におけるかけがえのない存在について比較する。「なるたる」で竜の子とリンク者は互いにかけてがえのない存在であると述べた。しかし、竜の子とリンク者は感情を介さない、利害関係で結ばれたドライな関係である。「ぼくらの」では、家族や仲間などの間に発生する利害の無い無償の愛が描かれており、人間同士の感情的な結びつきを重要視している。

鬼頭は、「なるたる」で命は代替がきくことを前面に押し出しており、自らの存在の無価値さについて描いているが、後に描かれた「ぼくらの」では人間の感情的な結びつきを前面に押し出している。「かけがえのない命」を否定しつつも、人間同士の感情的な結びつきにおいては、個人の重要さが強調されている。

鬼頭が二〇年掛けて実現したい世界観は、自らの道徳観のみに拠ったものではないということが「なるたる」と「ぼくらの」の比較で明らかになる。

## 若者論・ジャンル論

### \* コンプレックスと有能感

本作品に登場する少年少女のほとんどは、それぞれコンプレックスを抱えている。前章でも述べたが、シイナは母親から愛されていないことにコンプレックスを感じている。シイナの友人、佐倉明は極端に内向的で対人恐怖症気味である。のり夫は鶴丸に恋愛感情を抱いていながら、自らが男であるために彼と結ばれることはない。シイナのクラスメイトの貝塚ひろこは、いじめを受けている。「黒の子供会」の小森朋典は、病弱な母親を抱えており、近所では母親想いの良い子で通っているが、経済や学力に恵まれた人間を恨んでいる。恵まれた須藤は一番嫌いなのは自分の存在であると述べているし、さとみは小学校の頃いじめを受けていた経験から高慢な性格になっている。

彼らをコンプレックスの特徴から大きく二つに分けると以下の通りである。コンプレックスが自らの内面に向き、自信の喪失に繋がっている者と、他者軽視を通して自らの価値や能力を維持しようとする者である。特に、後者のような特徴を持つコンプレックスを、速水敏彦は「仮想的有能感」と名付けた。仮想的有能感とは、他者軽視を通して生じる偽りのプライドのことである。速水は、仮想的有能感が機能しやすい状況について以下のように述べている(6)。

あまり自分が経験したことのない領域や、自分に対して評価が定まっていない領域で、仮想的有能感は生じやすいと予想される。例えば、「数学の能力」といったものではないが、「将来を見通す能力」などといった漠然としたものに仮想的有能感  
は繁栄されやすいと言える。

さらに、「他者」軽視に際して、誰を軽視するのかという点に関しては、能力を熟知している親しい他者については機能しにくく、(中略)知らない他者の失敗などに対して、容易にその人たちの能力を軽視し、仮想的有能感を感じやすい。

さらに、仮想的有能感が生じる背景について、以下のように述べている（6）。

他者軽視に基づく仮想的有能感が生じる背景には「希薄化する人間関係」が存在する。簡単に言えば、人は親しい人間関係を喪失し、孤立すればするほど、外面的に傍若無人な他者軽視行動をとるようになる。つまり、現代の希薄化した人間関係においては、周りが支えてくれるという認識を欠くことになり、他者をむしろ脅威と見なすために、背伸びをして弱い自分を防衛しようとするのである。

速水が述べる仮想的有能感を持った若者の特徴が、作中において顕著に表れているのが須藤である。須藤は、川にゴミを不法投棄した不良たちを銃で射殺している。警察からの事情聴取の際に、以下のように語っている。

ゴミを捨てることの是非が問題ではないんです

その行為が正しいものかどうかではなく一旦決められた社会のルールが守れない

その精神が問題なんです

凡夫は規則を守ることが生存の絶対条件だ

ということですよ

『なるたる』（七卷一三九頁）

自らも不良を射殺し、「決められた社会のルール」を犯したのにも関わらず、不良たちを「凡夫」と蔑み、悪びれる様子を見せていない。つまり、須藤は不良たちを見下すことで、自らは「凡夫」ではないという自己肯定感を形成している。しかし、そんな須藤も、は自らの命が絶える直前に、以下のような本心を述べている。

いちばん嫌いなのは……

自分なんだ

『なるたる』（一二卷一三九頁）

須藤は、自信がもたらすのではない、他者軽視による自己肯定、つまり仮想的有能感を感じていたことが分かる。

次に、自尊感情の概念と本来の有能感について述べておきたい。自尊感情とは何か、遠藤由美は以下のように述べている。

自己に対する評価感情で、自分自身を基本的に価値あるものとする感覚。（中略）自尊感情は、その人自身に常に意識されているわけではないが、その人の言動や意識態度を基本的に方向づける。自分自身の存在や生を、基本的に価値あるものとして評価し信頼することによって、人は積極的に意欲的に経験を積み重ね、満足感をもち、自己に対しても他者に対しても受容的でありうる。このような意味において、自尊感情は精神的健康や適応の基盤をなす。

一方、本来の有能感の概念に関して、心理学者のホワイトが「周りの環境と効果的に相互交渉できる能力」と定義しており、「コンピテンス」と呼ばれる。発達心理学において、人に既に備わっている潜在能力と、環境に能動的に働きかけて自らの有能さを追求しようとする動機づけを、一体のものとしてとらえる概念を指すものである。

速水は、自らを基本的に価値あるものと見なす自尊感情と、能動的に自らの有能感を追求するコンピテンスを同一の概念とし、「自尊感情」とした。また、仮想的有能感の高低、自尊感情の高低によって四種類の有能感タイプが存在すると述べており、タイプ分けは以下の

通りである。

「全能型」…仮想的有能感も自尊感情も高いタイプ。他者に不満を抱いているが、自己にも満足はなく、満足している。頑固であったり、甘い自己認識を抱いている場合もある。

「自尊型」…仮想的有能感が低く、自尊感情が高いタイプ。他者に不満はなく、自己にも満足している。

「萎縮型」…仮想的有能感も自尊感情も低いタイプ。他者に不満はないが、自己には不満である。劣等感が強いのが特徴。

「仮定型」…仮想的有能感が高いが、自尊感情が高いタイプ。他者にも自己にも不満である。シイナや明は「萎縮型」に当てはまる。自信が持てず、自らに不満を抱いている。また、劣等感も強い。さとみは「全能型」に当てはまる。家が貧しいという逆境を跳ね除け、難関のお嬢様学校に合格する執念と自信がある。一方で、小学校時代にいじめられていたことから、多少卑屈な性格になっており、他者への不満を抱いている。自分に自信があり、他者にこれといった不満を抱いていない鶴丸は「自尊型」に当てはまる。対して須藤は、終始自信ありげな振る舞いを見せ、気に入らない他者は容赦なく殺害する。他者に不満を抱き、自己に不満はない「全能型」のように見える。しかし、実は自分の存在が最も嫌いであると述べている。つまり、他者にも自己にも不満を抱いている、鶴丸とは正反対の「仮定型」に当てはまる。物語上で正反対の機能を果たす鶴丸と須藤は、有能感というタイプ分けから見ても、対照的である。

小森とひろ子の有能感には相同性が見られる。先に述べた通り、小森は病弱な母を抱えており、経済的に貧窮している。ひろ子は父親から厳しい教育を受け、小学校でいじめられている。家庭や社会に不満を持ちながらも耐えながら生きる弱者である。この時、彼らは他者

にも自己にも不満を抱いている「仮定型」であると言える。しかし、竜の子を手にしたことをつきつけに、社会に反撃した。ひろ子の以下の台詞が象徴的である。

わたし我慢するのやめたんだ

わたしが我慢して誰かの犠牲になるとかそういうの

だって あれがあれば何でもできるんだから

気に入らないものは潰しちゃうの

『なるたる』（六巻一九六頁）

ひろ子は竜の子を手にしたことで、弱者であるというコンプレックスがなくなり、抑圧され続けてきた自己を解放している。他者への不満を抱いたまま、自信を得たため、「全能型」にシフトしている。小森とひろ子にとって竜の子は自尊感情を補助する機能を担っているのだ。しかし、竜の子によってもたらされる強さは、自らの内面的な自尊感情でも、自ら能動的に得た有能感でもない。つまり、竜の子に補助する自尊感情は、仮想的有能感をより強力にしてしまうのだ。

のり夫は「自尊型」と「仮定型」の両面性を持っている。美少女と見まがうほどの容姿をもっており、のり夫自らも容姿の美しさを自覚している。シイナやシイナの友人達の容姿を辛辣な言葉で切り捨てている。一方で、鶴丸へ抱き続ける叶わない想いと、鶴丸の子を設けることが出来ない性であるということが彼のコンプレックスとなっている。

鶴丸にとって僕は女の子じゃないもんな

でもそれでよかったのかも

だからどの女の子より キミのそばにいられた（中略）

言いたいと言えなかった……なあ

『なるたる』（一〇巻二〇一頁）

のり夫は、自らの性に負い目を感じて、最期まで鶴丸に想いを告げることなく息絶えた。想いを告げるほどの自信や勇気が持てず、鶴丸と恋愛関係になることが出来る女性に憧憬を抱いている。この時、彼は他者にも自己にも不満を抱く「仮想型」であると言える。

以上のことから、本作品では、若者がコンプレックスを抱いたことで形成しやすい人格を反映している。この時形成される人格は、コンプレックスを抱える自らの心を守るためのものであると考えた。しかし、物語上で生きる登場人物たちは一つの人格に留まらない。あるきっかけで抑圧されていた情緒が噴出することもある。本作品は、コンプレックスを抱える弱い自分をさらけ出しては生きてゆけないと考え、自分で形成した人格に固く閉じこもる面がありながら、本来の自分をさらけ出して生きてゆきたいという欲望を持った若者の二面性をうまく表現していると言える。

#### \* 道徳教育とセカイ系

鬼頭が否定する「かけがえのない命」という道徳観を若者論の観点から考察していく。

現在、中学校の道徳教育に採用されている教科書には「かけがえのない自他の生命を尊重して」という項目がある。この項目の始まりを飾る詩を一部抜粋する。

果てしない宇宙にあっても

はるか永劫の時の中にあっても

この私は

ただ一つの存在、二つとない存在

一人一人のかけがえのない生命を  
尊重しあって生きていきたい

この詩における「かけがえのない生命」の意味は何か。教科書のページを繰ると明らかになる。「かけがえのない生命」という見出しの後、以下のように記述されている。

奇跡のように偶然が重なって自分に生命が与えられたことや、その生命にもいつか終わりがあることを考え、私たちは、どのように自他の生命を尊重していけばよいのだろう。

生命の価値は先天的なものであると見なされている。つまり、我々人間は努力なしに生まれながらに価値がある存在であるという教育である。自らの存在価値は、社会的なプロセスを経ることがない。道徳教育において得られる生命の価値観、ひいては自己肯定感とは脱社会的であると言える。土井隆義は、このような脱社会的なメンタリティを抱える若者を「純粋な自分」と名付け、彼らの行動を以下のように述べている（7）。

いまや社会は、（中略）純粋さの対立項としての意味をほとんどたなくなっている。もはやそのリアリティを消失してしまっている。その結果、純粋さに対する憧憬が社会的なプロセスを経ることなく、身体性とストレートに結びつくようになっていく。身体は、自らの意思に関係なく、もって生まれてきた実在だからである。

土井は、自らの身体感覚を絶対的に信じる若者が求めやすい人間関係についても述べている（7）。

自らの生理的な感覚や内発的な衝動は、いまのこの一瞬にしか成立しえず、まったく刹那的なものである。(中略) 社会という土壌に根を下ろさない浮き草のようなものだから、風向き次第でどちらへも簡単に流され、一ヶ所に留まることがない。当然ながら、その直観に根拠づけられた純粹な自分は、一貫性を保ち続けることが難しくなる。その時々気分に応じて、自分の根拠も揺れ動くからである。だから彼らは、その不安定さを少しでも解消し、不確かで脆弱な自己の基盤を補強するために、身近な人びとからの絶えざる常任を必要とする。

これといった努力や本人の人格的な魅力無しに、他者からの承認を得ようとする若者の考へは、セカイ系における恋愛の特徴と一致する。セカイ系というジャンルにおいて、主人公は人格やルックスなどの具体的な長所を持たないが、恋愛相手から無条件に愛される。このことを「全的承認」という。

本論の第一章でも述べたが、セカイ系とは、主人公と恋愛相手との感情的な人間関係が、具体的な社会領域の媒介なしに、世界の終わりなどの非日常的な大問題に直結する物語構造を持つているものを指す。

「なるたる」において、主人公シイナの恋愛相手の鶴丸が死亡した際、見子は以下の台詞を述べてから地球を破壊した。

秕 この世界に 未練なくなりましたか？

じゃあ、なくなってもいいですよ

『なるたる』(一二巻二一九頁)

このことから、主人公と、その恋愛相手との感情的な問題が、世界の終わりに直接結びつ

いている。セカイ系において、世界の終わりと直結する恋愛相手との感情的な問題とは、二人の関係を維持することを取るか、世界の存続を取るかの究極の二択を迫られることである。本作品の場合、恋愛相手である鶴丸は既に殺され、死んでおり、二人の関係は既に終わっていると見える。セカイ系として読むには本作品の構造は不十分であると考えられる。なぜ、このような不十分な構造を持つのだろうか。

本作品は、セカイ系の脱社会的な部分、特に全的承認を乗り越えようとしているのではないかと考えられる。一旦は成就したシイナの恋愛が、相手の死によって終わりを迎えた。この時点で、シイナは母親を殺されている。つまり、シイナにとってのセカイはもう存在しないが、鶴丸の死を契機に見子の手によって地球が壊滅された。本作品の「世界の終わり」はセカイ系の特徴に漏れず脱社会的である。しかし、恋愛相手と世界の存続という究極の二択は存在しない。シイナは「セカイの終わり」を迎えた直後に「世界の終わり」を迎えたのだ。

多くの若者は全的承認を得たいという欲望に駆られている。しかし、現実には一番近いはずの肉親からも恋人からも全的承認を得ることは叶わない。そんな人々がセカイ系の物語を必要とするならば、本作品を読むべきではないだろう。「なるたる」は、セカイ系の特徴を持ちながら、全的承認が存在しない。

### おわりに

命は代替がきくものではない。誰も誰かの代わりにはなれないし、命は親から子、子から更に次の代へ、連鎖と続くものである。一つの命がなくなれば、その繋がりは途絶えてしまう。さらに、人間には情緒的な結びつきがある。家族、友人、恋人との関係を作り上げるうちに、自分が誰かにとってのかけがえのない存在になる。情緒的な結びつきを積み重ね続けるうちに、自分の命はかけがえのない存在になる。そこへ「かけがえのない生命」という教育を受ける。これらは外発的な自己肯定の根拠になる。鬼頭は「命は代替がきくから命たり



えるんだから」という言葉で、これらの根拠を否定した。

命は代替がきく、という考え方をすれば、私たちの命は社会の中で代替がきく歯車の一つである。鬼頭が言うように、今、私が死んでも誰も困らないし、変わらずに人間の営みは続いていく。「個人」という概念を導入し、人間一人ひとりを責任ある独立した存在として扱う近代的な価値観である。本作品において、竜の子と人間がやがて成竜という一つの生命体になる可能性を秘めているが、現実には、人間は生まれてから死ぬまで、一人の「個人」であり続ける。決して他者と繋がる事が出来ない世界で、代替がきく命であると自覚しながら生きていかなければならない。それは孤独なことである。

九〇年代、バブルの崩壊によって学歴社会神話、家族神話などの生きていくための指針ともいえる「大きな物語」が消失した。「大きな物語」を失った人々は九五年の地下鉄サリン事件、九九年のノストラダムスの予言など、世界の終末という幻想に想いを馳せた。しかし、世界の終末は訪れなかった。次なる「大きな物語」はもはや期待できない。人はそれぞれの物語を生きなくてはいけなくなった。確実な未来も目標もない日常が繰り返される。宮台真司は、これを「終わりなき日常」と呼んだ(8)。刺激のない「終わりなき日常」から脱出するには死んでしまおうしかないと考える人々が現れた。一九九三年に『完全自殺マニュアル』が一〇〇万以上を売り上げるほど、死に対する関心が高まっていた。

本作品のラストシーンにおいて海中鳥居が徐々に沈んでいくことで、竜の子に人間が取り込まれ、完全に解け合う未来が暗示されている。これは、他者と繋がりたいという思いを抱えながら、決して他者と繋がりがあうことなく「個人」として生きていかなければならない人々の願望を叶えている。さらに、世界の終末を思わせる物語に終わり方は「終わりなき日常」を生きなければならなくなった人々の、自殺願望や世界の終末を願う気持ちを反映している。「なるたる」は、どうしようもない生きづらさを抱えた人々のためのメルヘンなのだ。

(註)

- (1) 「なるたる読み終わった」
- (2) 不登校新聞「鬼頭莫宏さんに聞く、不登校・ひきこもり」  
(<http://www.futoko.org/news/page1022-2778.html>) 二〇一四年七月二十四日閲覧
- (3) 「オタクと形而上学」 (<http://aichikengei.blog40.fc2.com/blog-entry-1022.html>)  
二〇一二年九月一日閲覧
- (4) キャサリン・ブラックリッジ『ヴァギナ 女性器の文学史』 河出書房 二〇〇五年二月
- (5) 大林太良ほか『世界神話事典』 角川文庫 二〇〇五年三月一日
- (6) 速水敏彦『他人を見下す若者たち』 講談社 二〇〇六年二月一七日
- (7) 土井隆義『友だち地獄——空気を読む世代のサバイバル』 ちくま書房 二〇〇八年三月一〇日
- (8) 宮台真司『終わりなき日常を生きろ——オウム完全克服マニュアル』 筑摩書房 一九九八年三月一日

#### 参考資料

- ・中垣恒太郎・五島和美・田辺章・渡邊俊「ゼロ年代「セカイ系」アニメにおける社会領域と公共圏」 『大東文化大学紀要(人文科学編)』第四九号 二〇一一年